



TITLE:

自我体験の心理学的研究ーライフ  
サイクルの観点からみた<私>と  
の出会いの体験の意味ー(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

高石, 恭子

---

CITATION:

高石, 恭子. 自我体験の心理学的研究ーライフサイクルの観点からみた  
<私>との出会いの体験の意味ー. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13187>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（教育学）	氏名	高石 恭子
論文題目	自我体験の心理学的研究 ーライフサイクルの観点からみた＜私＞との出会いの体験の意味ー		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、人がどのように主体としての「自分」に気づき、自己関係を発達させていくかについて、「自我体験」という概念を手がかりに、それがライフサイクルの各時期にどのように生起するのか、またどのように個々人に影響を及ぼすのかという命題の解明を試みたものである。</p> <p>私が＜私＞をどう発見し（出会い）、違和や断絶を感じ、あるいは受け容れ、どのように再びつながるかという主観的体験の理解は、個人の個性化を支える心理臨床の営みにおいて、避けて通れない課題といえる。</p> <p>本論文ではまずこれまでの自我体験研究の歴史を概観して現在の到達点と課題を整理し、その上で著者の規定する自我体験について、1）非臨床群への調査研究から得られた基礎的なデータと、自伝的著作や小説・物語などから抽出した事例を提示し、2）それらをライフサイクルの観点から捉えて、各時期の自我体験の特徴と意味について考察し、3）経年実施した調査の結果から、時代による変化と今日の特徴について考察をおこなった。</p> <p>本論文では、小学生・中学生・高校生・大学生を対象に、著者が作成した「自我体験」の質問紙調査を実施した結果を、対象年代順に各章で提示し、数量的分析と自由記述の分析を行った。また、中高生版の自我体験質問紙を改訂し、1982年と同じ対象校の中高生（2005年）に経年実施した結果を提示し、考察している。</p> <p>まず第1章では、自我体験研究の歴史を概観し、現在の到達点と、概念的規定や方法論上における課題が整理されている。続く第2章では、小学生に質問紙調査を行い、さらに風景構成法を行った結果から、前思春期までの自我体験が検討されている。小4で、自我体験度がピークを示し、風景構成法の構成型が特徴的な視点の分裂を示す結果から、自我体験の生起と前思春期の視点移動（自我の対象的把握が可能になる認知発達）との関連が示唆された。第3章では、中学生・高校生の女子に実施した調査が主に取り上げられ、思春期・青年期の自我体験が検討されている。続く第4章では、大学生への調査から、青年期から若い成人期に想起される自我体験が検討されている。第5章では、多元的自己の時代と言われるポスト近代の自我体験の様相について、2005年に中高生女子に実施した質問紙調査の結果から検討され、終章では、本研究で見出されたライフサイクルの各時期における自我体験の特徴と意味、そして今後の研究に向けての課題がまとめられた。</p>			

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、人がどのように主体としての「自分」に気づき、自己関係を発達させていくかについて、「自我体験」という概念を手がかりに、解明しようとしたものである。また、それがライフサイクルの各時期にどのように生起するのか、またどのように個人に影響を及ぼすのかという大きな課題に取り組んだ労作である。

私が主体としての<私>をどう発見し、あるいは出会い、違和や断絶を感じ、あるいは受け容れ、どのように再びつながるかという主観的体験の理解は、個人の個性化を支える心理臨床の営みにおいて、避けて通れない課題といえ、心理臨床にとっても価値ある論考と言える。

本論文ではこれまでの自我体験研究の歴史を概観して現在の到達点と課題を整理した上で、小学生・中学生・高校生・大学生を対象に、著者が作成した「自我体験」の質問紙調査を実施した結果を提示し、数量的分析と自由記述の分析を行った。また、1982年と同じ対象校の中高生に2005年に実施した結果を提示し、多元的自己の時代と言われるポスト近代の自我体験の様相についても考察している。

本論文においては、1)小4で自我体験度がピークに達し、風景構成法が特徴的な構成型を示し、自我体験の生起と前思春期の視点移動との関連を示したこと、2)自我体験が子ども時代には瞬間のイメージ記憶として刻まれ、成長後再構成される可能性を示したこと、3)自我体験は、私と主体としての<私>の分離と結合という両義性をもち「分離」の側面が強く体験された場合には危機的性質を帯び、そこに心理臨床の関与が求められることなどを明らかにした点に本論文の独自性がある。難しいテーマであるにも関わらず、長年に亘ってこのテーマに取り組み続け、貴重なデータを蓄積したうえで論考を加えたことが高く評価された。

試問では、本論文のテーマに関して、臨床心理学を越えて活発な討議が行われ、本論文のテーマの幅広さや深さ、そして、本論文がそうした知的刺激を喚起することが改めて認識されることとなった。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年3月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降